

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770048

研究課題名(和文)ブルーノ・ムナーリの芸術形成

研究課題名(英文)The formation of Bruno Munari's art

研究代表者

太田 岳人(OHTA, Taketo)

筑波大学・芸術系・特別研究員(PD)

研究者番号：40722632

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：ブルーノ・ムナーリ(1907-1998)は、第二次世界大戦後において最も有名なイタリアの芸術家・デザイナーの一人である。本研究は、1945年までの時期におけるムナーリの創作活動について、とりわけミラノの環境に注目することを通じ、この芸術家の活動拠点であるとともに近代イタリアの商業と出版の中心であったこの都市が、世界大戦後における彼の飛躍の基盤をいかに準備していったかについて検討している。

研究成果の概要(英文)：Bruno Munari (1907-1998) is one of the most well-known Italian artists-designers after the Second World War. This research explores Munari's creative activity until 1945, focusing an environment of Milano as the artist's background and the commercial and publishing center of modern Italy, where prepared a dramatically his rise after the World War.

研究分野：西洋美術史

キーワード：美術史 ブルーノ・ムナーリ 未来派 国際芸術運動

1. 研究開始当初の背景

ブルーノ・ムナリ(1907 - 1998)は、抽象美術、プロダクト・デザイン、絵本といった分野において幅広く活躍し、第二次世界大戦後において世界的知名度を得たイタリアの芸術家の一人である。日本でも1960年代から、先端的な芸術家、批評家、デザイナーの間で高い評価を得るようになり、その名声は1985年に東京都「こどもの城」で行われた回顧展で決定的なものになった。2007年には、生誕100周年記念展が板橋区立美術館などで開かれ、その前後から彼の理論的著作の数々も翻訳され続けているなど、前世紀の代表的芸術家/デザイナーとしてのムナリへの関心はますます盛んである。

しかし、第二次世界大戦後のムナリの豊かな活動へのこうした注目にもかかわらず、彼の創造を何が培っていたのかという分析はなされておらず、若き日の彼が自身の芸術をどう形成していったかについての考察もまた、あいまいな推測の域にとどまってきた。ムナリ自身が「天才的な芸術家」という概念に否定的だったことが伝えられているにも関わらず、彼についての歴史的な位置づけを欠いた考察がともすれば「天才としてのムナリ」像を再生産し続けるだけにとどまっているという現状は、日本ばかりの問題ではない。デザイン史家アレッサンドロ・コリツィの博士論文『ブルーノ・ムナリと近代的グラフィック・デザインの創造：1928 - 1945年』(ライデン大学、2011年)や、ロンドンで行われた『未来派としての過去』展(エストリック・コレクション、2012年)といった少数の例外を除けば、美術市場の人物としてムナリの再検討という仕事は、欧米においてもまだ始まって間もない状況であった。

2. 研究の目的

本研究では、未来派芸術運動の一員に加わることでムナリの芸術上のキャリアが開始されたと目される1927年から、第二次世界大戦の終結する1945年までの時期を、芸術家の自己形成期として想定した。その上で、現在ほとんど知られていない同時期のムナリの創作活動の実態について、特に彼が根拠地としていたミラノという都市の環境とのつながりを踏まえつつ、明らかにすることを目的として設定した。

研究代表者がミラノに注目したのは、ムナリが未来派運動の枠を超えた芸術的素養を得ることができた理由として、近代イタリアにおける商業および出版の最大の中心地であるこの都市で活動していたことが、大きく影響していると想定されたからである。イタリアのジャーナリズム史研究は、同国の二つの世界大戦間期において、それまで発展の遅れていた広告業や、雑誌を中心とする情報メディアが急速に台頭したことを指摘して

いる。イタリア最大の出版社としての地位をこの時期に確固たるものにしたモンダドーリ社、同社から独立し文芸系出版社として台頭していくボンピアーニ社といった出版企業は、イラストレーションや誌面デザインのような仕事をムナリに提供するとともに、第二次世界大戦後にも続く彼の密接な人的つながりをもたらすものであった。研究代表者は、こうしたミラノの出版の現場にムナリが立ち会っていたことが、造形芸術のみにとどまらない大戦後のムナリの多面性にも大きな影響を与えていると判断し、研究の方針を定めた。

3. 研究の方法

ムナリ個人の資料収集にのみ特化したアーカイブ、特に第二次世界大戦以前の芸術家についてのそれは存在しない。ただし戦前のムナリの手による図版、および文字テキストの一部は、複数の研究者によって運営されているムナリの情報サイト「MunArt」で公開されているため、本研究の初年度前半においては、電子公開されているこうした史資料を熟読した。

そのうえで研究代表者は、平成26年度と27年度の各年度においてイタリアに渡航し、ローマ国立図書館、フィレンツェ国立図書館、ミラノ国立図書館および市立図書館といった各地の公共図書館を訪れ、

- (1) ムナリがイラストレーター・編集者として参画していた各種雑誌(年刊文芸誌『アルマナッコ・レッテラーリオ・ボンピアーニ』、ユーモア漫画誌『セッテペッロ』、女性誌『グランディ・フィルム』、写真グラフィ誌『テンポ』など)
- (2) ムナリが図版を担当した、パンフレットや絵本(広告冊子『リノリウム：その製造』、教育絵本『世界・空気・水・大地』など)
- (3) ムナリの図版、特に漫画やイラストレーションとの比較が可能な、他の作家のイメージが掲載されている同時代雑誌(ユーモア漫画誌『ベルトルド』、『マルカウレリオ』)など、

を中心に閲覧し、1930 - 40年代の芸術家の手による図像や記事の多くのデータを資料として収集した。

それと合わせて研究代表者は、研究対象が約10年にわたって未来派運動に参加していた事実から、現在イタリアの国内外に存在する未来派芸術家の、複数のアーカイブに所蔵されている各種書簡も、重要な同時代史料として調査の対象とした。中でも、トレント・ロヴェレート近現代美術館付属20世紀アーカイブに所蔵されている芸術家の史料の文庫のうち、陶器作家トゥリオ・ダルビソラや画家・彫刻家タイヤートの文庫からは、彼らとムナリが未来派の同志として通信を交

わしていた形跡を確認した。

また同時期には、別個に取得していた日本学術振興会特別研究員奨励費によって、アメリカのイェール大学のバイネッケ図書館に所蔵される、未来派の指導者と運動の若手芸術家との間で取り交わされた書簡を保管する「マリネッティ・ペーパーズ」を調査し、本研究をその成果によっても深めることができた。

4. 研究成果

二年間の本研究期間中に研究代表者は、美術史的アプローチに基づきムナーリの美術史的位置づけを行うこと、また彼の自己形成期における表現上の模索を、同時代史料によって具体的に検証していくことを主眼とすることで、3件の雑誌論文と4件の学会発表をものすることができた。

初年度の調査を一通り終えた2015年3月に発表した論文「初期ブルーノ・ムナーリ研究の動向 Alessandro Colizziの博士論文を中心に」(雑誌論文)は、本研究の参照点であるコリッツィの先駆的モノグラフの内容紹介と検証を通じ、日本における本格的なムナーリの美術史的研究に向けて視座を提示したものである。これをふまえて、同年10月に研究代表者は、「若き日のムナーリ：1930 - 1940年代における芸術家の自己形成」、『ムナーリの機械』の起源：漫画文化との関連を中心に、「初期ブルーノ・ムナーリと写真：『ムナーリの写真記事』を中心に」(学会発表)といった、一連の口頭発表を3つの学会・研究会で行った。これらの発表では、1930年代の芸術家が、様々なミラノの雑誌で発表した、イラストレーション、フォトモンタージュ、誌面デザイン、漫画の作例を論じつつ、それらの作品に彼の芸術的創造の実験の形跡が現れていることを分析している。またそうした成果の蓄積が、1940年代に入り芸術家が単独の名義で発表した一連の著作である、30年代末に発表された漫画に端を発した『ムナーリの機械』(1942)や、『テンポ』誌に掲載された記事を再構成した『ムナーリの写真記事』(1944)などに、いかに結び付いていったかについても報告している。

また、こうした研究を補足するものとして、直接ムナーリを主題としたものではないものの、彼の自己形成とも密接に関係を持っている、二つの大戦間期におけるイタリアの芸術および文化の状況についての考察も生まれた。ムナーリの参加した「ミラノ航空展」(1934)にも影響を与えた、前衛的芸術家を起用した政治的展覧会で知られる「ファシスト革命展」の意義を扱った「ファシスト・イタリアの祝祭 1932年の『ファシスト革命展』」(雑誌論文)や、初期未来派における代表的芸術家であったウンベルト・ボッチョーニのイメージが、彼の死後の運動内におい

てムナーリを含めた後継世代にどう受容されて行ったかを論じた、「ボッチョーニの記憶 第一次世界大戦後の未来派運動の展開をめぐる」(学会発表)が、それにあたる。

今後の課題は、上述の口頭発表三件を論考の形にまとめ、学術誌に掲載していくことである。現在のところ、学会誌に投稿し査読を受けているのは、『ムナーリの機械』の起源』についての発表のみである(現在、査読者側から再審査の要求を受け改稿作業中)。本来の研究計画から見れば遅れも生まれているが、この遅れは学会発表の際、会場から受けた質問や指摘によって、自己形成期のムナーリについて把握する上で、同時代のイタリアの写真史や児童文学史の状況をさらに広範に理解する必要性を痛感させられたためである。「イタリア・ファシズム政権期の写真と雑誌について」(雑誌論文)は、『ムナーリの写真記事』についての発表を論考化するための前提事項として、ムナーリもその前線に立っていた、両大戦間期のイタリアにおける写真と雑誌メディアの関係性について考察する中で書かれたものである。速やかにすべての発表の論考化を進め、これからの日本におけるムナーリについての学術研究の基盤たりうるものを提示したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

太田 岳人「ファシスト・イタリアの祝祭 1932年の『ファシスト革命展』」、日伊文化研究、査読あり、第54号、2016年、48 - 60頁

太田 岳人「イタリア・ファシズム政権期の写真と雑誌について」、千葉大学大学院人文社会科学部プロジェクト報告書、査読なし、第305号、2016年、57 - 69頁

太田 岳人「初期ブルーノ・ムナーリ研究の動向 Alessandro Colizziの博士論文を中心に」、千葉大学大学院人文社会科学部プロジェクト報告書、査読なし、第294号、2015年、71 - 80頁

〔学会発表〕(計4件)

太田 岳人「若き日のムナーリ：1930 - 1940年代における芸術家の自己形成」、関西イタリア学研究会例会、2015年10月25日、立命館大学(京都府京都市)

太田 岳人「『ムナーリの機械』の起源：漫画文化との関連を中心に」、イタリア学会全国大会、2015年10月17日、学習院大学(東京都豊島区)

太田 岳人「初期ブルーノ・ムナーリと写真：『ムナーリの写真記事』を中心に」、

美学会全国大会、2015年10月10日、早稲田大学（東京都新宿区）
太田 岳人「ポッチョーニの記憶 第一次世界大戦後の未来派運動の展開をめぐって」美術史学会全国大会、2014年5月18日、早稲田大学（東京都新宿区）

6 . 研究組織

(1)研究代表者

太田 岳人（OHTA, Taketo）
筑波大学・芸術系・特別研究員（P D）
研究者番号：4 0 7 2 2 6 3 2